

<学術論文>

構文環境における新たな意味的連関の発生

—「言う」と「来る」を中心に—

岩男考哲 信州大学教育学部言語教育講座

キーワード: 「たとえば」、「といたら」、「という」と、「ときたら」、構文レベルの意味

1. はじめに

現代日本語の動詞「言う」の条件形¹⁾を用いたものの中で複合辞として扱われるものに以下の形式がある。

(1) といえば/といたら/という

これらは従来、主題提示の複合辞としてまとめられている(森田・松木1989, 日本語記述文法研究会2009)。その一方で、当然ながら、これらの形式には本動詞としての用法も存在する。そこで本稿ではまず、上記3形式の用法を詳しく確認したい。具体的には上記3形式が複文としての用法(本動詞としての用法)と単文としての用法(複合辞としての用法)とを併せ持つことと、その中でも「といたら」のみが「感情的」意味(森田・松木1989)を表すことを確認する。これは従来の研究でも十分な整理が行われていないため、必要な作業であると思われる。その後、本動詞としての用法の一部と、「感情的」な意味の「といたら」には「来る」を用いた複合辞「ときたら」との意味的なつながりが見出せることを指摘し、そのつながりは単語レベルでは存在しておらず、構文レベルによって生じたものであると主張する。また、この主張の妥当性を示すために、「言う」と「来る」以外にも単語レベルでは意味的なつながりが見いだせず、構文レベルになるとつながりが見いだせる表現が存在することを指摘する²⁾。

本稿の構成は以下の通りである。まず2節で先述の「言う」の条件形にはどのような用法が存在するのかを確認する。また、それと関連して岩男(2009)に基づきながら「来る」のタラ形である「ときたら」の用法も瞥見する。次に3節では単語の意味にはまったく関わりのなさそうな「言う」と「来る」の間に意味的な接近が見られる現象を指摘する。それを受けて4節では3節で指摘した「言う」と「来る」の意味的連関は単語レベルでは見出せず、構文レベルで生じる意味というものの存在を認めることで初めて説明できるものであることを述べる。5節では本稿のまとめを行い、今後の課題を挙げる。

2. 「言う」と「来る」の用法

本節では、「言う」の条件形と「来る」のタラ形「ときたら」の用法を観察する。

2.1 「言う」条件形の用法

本稿では「言う」条件形の用法を大きく3つに分類する。

2.1.1 引用

「言う」の条件形の3形式は非常によく似た用法を持つ。まずは引用構文における本動詞としての用法から見ていく。

- (2) カシュウは死んだのだ。それを男にどう話そうか、と考えた。死んだと言えば、理由を聞かれる。少し面倒なことだ。

（『ヴォイド・シェイパ』森博嗣／中央公論新社）

- (3) 「亮平くん、朝ごはんは食べたの？」「ううん、食べてない——今朝、僕が学校へ行くって言ったら、母さんスネちゃって、つくってくれなかった」

（『背の眼』道尾秀介／幻冬舎）

- (4) 話し方にもコツがあります。例えば、子供たちを集中させたい時は、「自由に遊んでいいよ～、あ、でもね」と言うと耳を傾けてくれます。

（『日経ビジネスアソシエ』2009.4.21／日経BP社）

これらは引用構文において本動詞「言う」が条件形で用いられているものである。それぞれ後件の成立が前件の成立に依存しており、その前件で表わされるのは誰かが何かを「言う」事態だとまとめることができよう。その「言う」を契機に「理由を聞かれる」「スネる」「耳を傾ける」といった事態が生じているのである。この「いえば/いったら/いうと」間の関係は従来の条件表現研究の一部として扱われるものである。

何度も述べているように、この「言う」は本動詞である。動詞はその本来の性質として否定形をとることができる。そして当然ながらこの〈引用〉の「言う」は本動詞であるので、次のように否定形をとることが可能である。

- (2) 死んだと言わなければ、理由を聞かれる。
 (3) 今朝、僕が学校へ行くって言わなかったら、母さんスネちゃった。
 (4) 「自由に遊んでいいよ～、あ、でもね」と言わないと耳を傾けてくれません。

これは以下で確認する他の用法には無い点であるので言及しておく。

以上、ここでは「言う」条件形の引用構文における用法を確認した。

2.1.2 応答

次に本稿で〈応答〉と仮称する用法を観察する。

- (5) 「私は、育ちが良いとは思えません。どんな素性の人間なのか、自分でもわかりません。山奥で何をしていたのかといえば、ただ毎日食べるものを探しておりました。豊かな暮らしではありません」

（『ヴォイド・シェイパ』森博嗣／中央公論新社）

- (6) 例えば国道なら国道の補修というものの優先順位はだれが決めるかといったら、従来は建設省がやっていたわけだ、今でいう国交省がね。

http://mytown.asahi.com/tokyo/news.php?k_id=13000140902240001

- (7) 俺は蓬莱倶楽部関係者の電話帳の入手に成功した。なぜ電話帳が欲しかったのかというと、電話番号から住所を探り当てようと考えているからだ。

『葉桜の季節に君を想うということ』歌野晶午／文藝春秋

目につく特徴として、前件に疑問表現が生起しているという点が挙げられよう。これはそれぞれ、(5)は「何をしていたのか」という問に対する答えが述部で「毎日食べるものを捜していた」と提示されており、(6)の「優先順位は誰が決めるか」という問の答えが述部「従来は建設省がやっていた」であり、(7)は「なぜ電話帳がほしかったのか」という問に対する答えが述部で「電話番号から住所を探り当てようと考えているから」と述べられている。このように、〈応答〉では「言う」の条件形に前接する部分が「問い」で、それに対する「答え」が述部で提示されるという関係にあるとすることができる。

以下、先の〈引用〉との比較を通して〈応答〉の特徴を考察する。まず、〈引用〉との違いを2点挙げる。1点目は、この用法の場合、〈引用〉の「言う」とは異なり否定形をとることができない。そもそも、否定形をとる、つまり「言わない」のであれば、述部でその答えを提示する必要はなくなる。この否定形をとらないという点に鑑みるに、この用法の「言う」は典型的な動詞とは言えないことになる。よって、動詞のカテゴリから外れつつあるものと位置づけることができる³⁾。

- (5) *山奥で何をしていたのかといわなければ、毎日食べるものを探しておりました。
- (6) *国道の補修というものの優先順位はだれが決めるかといわなかったら、従来は建設省がやっていたわけだ、今でいう国交省がね⁴⁾。
- (7) *なぜ電話帳が欲しかったのかといわないと、電話番号から住所を探り当てようと考えているからだ⁵⁾。

〈引用〉との違いの2点目として、意味の面に着目すると、これは先に見た(2)～(4)と違い、前件の「言う」という事態に依存して後件が成立したものとは言えないという点が挙げられる。例えば(7)であれば『なぜ電話帳がほしかったのか』と言うという行為によって「考えている」という行為が成立したとは言えない。他も同様である。このように〈応答〉には〈引用〉のような依存関係は見られない。しかし、ここでは新たな「依存関係」が成立していると言える。既に述べたように、〈応答〉の前件には疑問表現が用いられる。そして、それに対する「答え」が後件で述べられることになる。つまり、「疑問—答え」という形で前件と後件は相互依存関係にあると言って良い。これと関連して、〈引用〉における依存関係との違いとして「言う」の部分が前件と後件の依存関係から外れているという点が指摘できよう⁶⁾。〈引用〉では「～と言う」全体と後件が依存関係にあったのに対し、〈応答〉は『疑問』条件形『答え』の「疑問」と「答え」の間に依存関係があると言える。

ただし、〈引用〉との類似点も無いわけではない。それは前件の「と」が受ける表現が独立文に近い形で使用されている点である。つまり、〈応答〉の「たとえば/いったら/いうと」は

文に近い形式を受ける表現だと言える。例えば(6)において提題の助詞「は」が用いられている(「優先順位は」)ことに注目されたい。これは次に見る複合辞としての用法が名詞句に後接するのと異なる点である。ただし、〈応答〉の「と」は完全な独立文を受けているわけではない。このことは次の例からも分かる。

(5*) *山奥で何をしていたのですかといえば、毎日食べるものを探しておりました。このように、聞き手めあての表現(「です」)は「と」の内部に生起できない。これは例えば〈引用〉の(4)において「と」が終助詞「ね」を受けていることと対照的である。このことからやはり、〈引用〉と〈応答〉の前件は似てはいるものの厳密には性質の異なるものだと言える。

以上、本稿が〈応答〉と仮称する用法の特徴を〈引用〉との比較を交えながら考察した。

2.1.3 複合辞

最後に見るのが、先行研究において複合辞の一種として扱われている用法である。

- (8) 効果の速さからして、かなり毒性の強いものだ。しかも、呼吸困難と痙攣を起こしていたから、神経毒の疑いが大きい。主な毒物の中でその手のやつといえば、青酸カリ、ストリキニーネ、アトロピン。ニコチンや砒素でもありうる。

(『十角館の殺人』綾辻行人／講談社)

- (9) 先週末から私はインドネシアのバリ島にきている。バリといったら地上の楽園ともいわれる南国の島国。

http://eco.nikkei.co.jp/column/cycling_yamazaki/article.aspx?id=MMECCg000027042009

- (10) 「彼に耕一くん殺害の犯人を気づかせたのは、その前の会話なんだ」「その前の——」糠沢老人にあの女の話をする直前というと、私が玄関を出る前だ。

(『背の眼』道尾秀介／幻冬舎)

この用法の特徴としては、各条件形に前接するのは名詞句に限られるという点が挙げられる。この点がこれまでに見てきた2つの用法と大きく異なる点である。

複合辞用法は先行研究において主題提示の形式とされていることから分かるように、条件形がマークする名詞句の属性や指示対象を述部で述べる文を構成する⁷⁾。(8)(10)は指示対象を、(9)は属性を述べる文である。

ただし、この用法には〈引用〉や〈応答〉とのつながりを感じさせる性質も存在する。まず、〈引用〉とのつながりを挙げる。先に、この複合辞用法の中には主題部の属性を述べる文が存在することを述べたが、こうした属性を述べる用法は引用構文にも見られるのである。

- (11) この珈琲はフルーツのような味と言えばいいんだろう。とにかく珍しい味だ。

- (12) 女神のようだといったら言い過ぎかも知れないが、彼女は非常に献身的だ。

- (13) 苦勞せずにお金が入ると言うと怪しげだが、儲かることには間違いない。

これはそれぞれ「フルーツのような味と言う」事態に対する「良い」という属性(11)、「女神のようと言う」事態に対する「言い過ぎ」という属性(12)、「苦勞せずにお金が入ると

言う」事態に対する「怪しげ」という属性(13)を付与しているものである。そもそも、この複合辞用法は本動詞用法からの派生と捉えるのが最も自然な理解だと思われるが、仮にそう理解するとその本動詞用法における上記のような働きが複合辞用法にも残っているとすることができる。この点については、更に通時的な調査も必要となろう。

次に〈応答〉と似た部分を挙げる。複合辞用法の例は以下のようにパラフレーズすることができる点に注目されたい。

- (8) 主な毒物の中でその手のやつには何があるかといえば、青酸カリ、ストリキエネ、アトロピン。ニコチンや砒素でもありうる。
- (9) バリはどんな所かといったら地上の楽園ともいわれる南国の島国。
- (10) あの女の話をする直前とはいつかというと、私が玄関を出る前だ。

このことは、複合辞用法も意味的には先の〈応答〉に似た意味を内包していることを意味していると言えよう。このように、複合辞用法は名詞句に後接するという点で特異性を見せるが、意味的には他の用法とのつながりを見出すことが可能である。

この用法については、もう1つ注目すべき点がある。それは「といったら」の特異性とでも言うべき現象である。この複合辞用法の中でも「といったら」はただ属性や指示対象を提示するに留まらず、話し手の「感情」とでも呼ぶべき意味を示すことがある(森田・松木1989)。以下のような例がそれにあたる。

- (14) 先日行われた今年のパリオでは、「カメ」市街区チームが優勝。シエナの人たちのこの日の盛り上がりといったら(??といえば/??というと) すごく、自分の市街区の仲間たちと飲んで食べて歌を歌って大騒ぎ。

http://www.nikkei.co.jp/style/if/italia/you/i_event002.html

(14)からも分かるように、この「感情」を表す「といったら」は「といえば」「というと」との置き換えができない。これは先の(8)～(10)がそれぞれ他の「言う」の条件形と置換可能であるのとは大きく異なる点である。

以上、他の用法との比較を行いながら複合辞用法の特徴を示した。

2.2 「ときたら」の用法瞥見

次に動詞「来る」の条件形のうち、タラ形「きたら」に助詞「と」が前接した「ときたら」という形式の用法を観察する。この形式は従来複合辞の一つとして扱われてきた(森田・松木1989, 日本語記述文法研究会2009)。そこでここでは岩男(2009)を参考に「ときたら」の用法を瞥見する。これは次の3節で「言う」と「来る」の意味的連関を考察するためにも必要な作業となる。

岩男(2009)は「ときたら」の用法を3つに分ける。その一つめは〈行為の接近〉と呼ばれるものである。これは(15)のように発話が向けられるといった状況も表わすが、(16)のように、発話以外の行為が向けられるといった状況も表わし得る。

- (15) バンド紹介がある前から拍手と声援。指笛が鳴る人は鳴らしてみましょ。バ

ンド紹介が「〇〇バンドです！ではどうぞ！」と来たら盛大に拍手。

<http://www.takasakimarching.com/etc/enjoy.html>

- (16) 5三角成ときたら5二金で辛抱する感じでしょうか。

<http://homepage2.nifty.com/hirotan/seikai-kaitou38-47.htm>

2つめは〈連想〉と呼ばれるものである。

- (17) 特に24巻は私が一番好きなファイリー編でしかも表紙にイエローが載っている！ときたらもう買うしかありません！！

<http://netkun.com/pokemon/qa/comment/comment24.html>

これは、「ときたら」に前接する部分の意味から連想する事物を「ときたら」の後ろに挙げる用法だとされている。〈行為の接近〉との違いとして「来る」の動作主の生起が〈連想〉では不可能である点が指摘されている。

そして3つめは〈評価〉と呼ばれるもので、以下のようなものがそれにあたる。

- (18) スコッチの本場のことゆえ、たとえ場末のパブであってもウイスキーの類はまああまあの味であったが、その時代のイギリスのビールときたら、アルコール度数も低くそれはもうまるで水みたいな味もそっけもないしろものだった。

(asahi.com)

他の用法と異なるこの用法の特徴として、「来る」の動作主が生起不可能な点と「来た」という形で述部になることが不可能である点が指摘されている。

以上、岩男(2009)で提示されている「ときたら」の用法を瞥見した。そこで次に3節で「と」+「言う」の条件形と「ときたら」を対象にしながら「言う」と「来る」の意味が接近する現象を観察する。

3. 「言う」と「来る」の意味的連関

本節では「と」+「言う」の条件形と「ときたら」が置換可能な現象を指摘する。その前にまずは以下の点を確認しておきたい⁹⁾。

- (19) 田舎から両親が来る。(≠田舎から両親が言う。)

- (20) 子供がわがママを言う。(≠子供がわがママを来る。)

この現象は(日本語母語話者にとっては確認する必要も無いくらい当たり前のことなのかも知れないが)、動詞「来る」と「言う」は通常同じ出来事を述べるができないことを示している。このことは間違いない事実ではあるのだが、しかし、ある条件下ではこの両者が意味的に接近することがある。

- (21) バンド紹介がある前から拍手と声援。指笛が鳴る人は鳴らしてみましよう。バンド紹介が「〇〇バンドです！ではどうぞ！」と来たら盛大に拍手。(=15)

- (21) バンド紹介がある前から拍手と声援。指笛が鳴る人は鳴らしてみましよう。バンド紹介が「〇〇バンドです！ではどうぞ！」と言ったら盛大に拍手。

このことは、引用構文の一部では、「言う」と「来る」が同じ状況を表すことが可能であることを表している。

また、両者の置き換えが可能なのは、(21)のような引用構文に留まらない。

- (22) 写真の中の容子は相変わらず化粧っ気に乏しくて、ラフな髪型ときたら、ヤマアラシの威嚇ポーズそっくりだ。

『生首に聞いてみる』法月綸太郎／角川文庫

- (22') 写真の中の容子は相変わらず化粧っ気に乏しくて、ラフな髪型といったら、ヤマアラシの威嚇ポーズそっくりだ。

この場合も「言う」と「来る」が置換可能である⁹⁾。これらの事実を、通常では意味的な接点のない動詞「言う」と「来る」が特定の状況においては意味的な接近を見せることを示している。そこで、本節においてこの両者はどういった状況で接近するのかを考えたい。

まず(21)(22)から分かるように、「言う」と「来る」が意味的に接近するのは、助詞「と」に「言う」「来る」が続く場合であることが分かる。そこで、本稿では2節で挙げた“「と」+「言う」の条件形”の用法と「ときたら」の用法とを比べ、両者の意味が接近する条件を挙げたい。

まずは、(21)からも明らかのように引用構文において「言う」と「来る」は意味的な接近を見せる。付言ながら、これは条件節だけではなく主文末の述部でも確認できる。

- (23) いきなり食べ始めたかと思ったらすぐに「おかわり」ときた。

- (24) いきなり食べ始めたかと思ったらすぐに「おかわり」と言った。

この場合の「言う」と「来る」の意味の微妙な違いを考察することは本稿の目的ではないので詳しくは述べないが、「言う」を用いるのに比べ「来る」を用いることで、引用句内の発話が当該の文の発話者に向けられたという意味をより明示しているものと考えられる。

ただし、引用構文であれば常に「言う」と「来る」が置換可能だというわけではない。例えば次のような例では置き換えは難しい。

- (25) 畑は入ってくるなり尾崎に「お前のせいで負けたんだ」と言った。

- (25') *畑は入ってくるなり尾崎に「お前のせいで負けたんだ」ときた。

詳細は別稿を期したいが、以上の観察から他者の発話が当該の文の話し手に向けられたという状況の場合、引用構文の「言う」と「来る」の意味は接近すると言える¹⁰⁾。

他にもこの両者の意味が接近することがある。それは複合辞用法の場合(「ときたら」は〈評価〉の場合)である。とは言え、これも複合辞用法であれば常に両者が接近するというわけではない。以下のように、複合辞用法であっても「言う」条件形が「ときたら」と置き換えられないものは存在する。

- (8") ??毒物の中でその手のやつときたら、青酸カリ、ストリキーネ、アトロピン。ニコチンや砒素でもありうる。

- (9") *先週末から私はインドネシアのバリ島にきている。バリときたら地上の楽園と

もいわれる南国の島国。

(10*) *「彼に耕一くん殺害の犯人を気づかせたのは、その前の会話なんだ」「その前の——」糠沢老人にあの女の話をする直前ときたら、私が玄関を出る前だ。では、複合辞用法の中でもどういう場合に「言う」と「来る」は意味的な接近を見せるのか。それは、先に「といたら」の特異性として挙げた「感情的」意味を表す時である。

(22) 写真の中の容子は相変わらず化粧っ気に乏しくて、ラフな髪型ときたら、ヤマアラシの威嚇ポーズそっくりだ。

『生首に聞いてみる』法月綸太郎／角川文庫

(22) 写真の中の容子は相変わらず化粧っ気に乏しくて、ラフな髪型といたら、ヤマアラシの威嚇ポーズそっくりだ。

(22)の「といたら」が「といえよ」や「という」との置き換えが不可能であることから、この(22)の「といたら」が「感情的」意味を表すものであることが分かる。そしてその場合、この「といたら」は「ときたら」と置き換えが可能である。

以上、本節では「言う」と「来る」が置き換え可能になる状況をこの両者の意味的な接近の現れと捉え、それはどういった場合に起きるのか考察した。結論としては、引用構文の一部と複合辞用法の中の「感情的」な意味を表す場合にこの現象が生じることが明らかになった。これを受けて次節では、単語レベルではつながりがないはずの「言う」と「来る」に意味的な連関が生じる理由を説明するためのある提案を行う。

4. 単語レベルの意味、構文レベルの意味

本節では単語レベルではつながりの見出せない「言う」と「来る」に「と+言う/来る」という形式になるとつながりが生じるという現象を受け、言語の意味には単語レベルの意味だけではなく、構文レベルの意味も存在するという主張を行う。

そのためにまずは、基本的な事柄を確認しておきたい。様々な動詞の中には意味的な連関の見出しやすいものとそうではないものが存在する。例えば「置く」と「ある」であればそれが容易に見出せる。

(23) 机の上に花瓶を置く。

(24) 机の上に花瓶がある。

このように、両者の間には『置く』の結果『ある』という状態が生じる」といった意味的な連関が見出せる。よって、「置く」「ある」から生じた「ておく」「てある」の間にも意味的な連関が見出せるのは理解しやすい¹¹⁾。

ところが、(19)(20)で確認したように、「言う」と「来る」ではこうした連関を見出すのは容易ではない。しかし既述のように、引用構文で用いられると、両者が同じ状況で用いられるし、複合辞用法においても同様であった。これは単語同士ではつながりが見出しにくい動詞であっても構文環境によってそのつながりが生じることがあることを示しているというのが本

稿の主張である。このように引用構文で用いられることによって生じる「言う」と「来る」の接近であるが、そのつながりが複合辞の用法においても見出せるのである。それが先に見た「と
いったら」と「ときたら」の意味的な接近なのだと言える。つまり「言う」と「来る」は引用
構文内で使用されることで初めて意味的連関が生まれ、それが複合辞用法における意味的な接
近にも関わっているのである。

この単語レベルではつながりが見出しにくいもの同士が構文環境によってつながりを持つ
という現象は、他にも見られる。例えば「だけ」と「まで」という助詞は次のように通常はつ
ながりがない。

(25) パンを3個 (だけ/*まで) 食べた¹²⁾。

(26) 3時 (まで/*だけ) 待った。

ところが、「動詞+だけ/まで+だ」という構文環境であれば両者は意味的に接近する。

(27) こうなったら、法的手段をとる (だけ/まで) だ。

これも特定の構文環境によってつながりが生じる事例の一つだと言える。

本研究で提示した複文用法と単文用法とのつながりについては、通時的な研究も行うことで
補強されなければならないものであるが、単語レベルではつながりが見出しにくい語間に、あ
る構文環境で用いられることでつながりが生じることは、(それと同じ形式が) 複合辞におい
てもつながりが見出せることと決して無関係ではあるまい。ここでの主張が妥当なものである
のならば、言語には単語のレベルの他に、構文レベルにおいても発生する意味が存在するとい
うことになる。

5. おわりに

本稿では「言う」の条件形「といえは/といったら/という」と3形式の複文としての用法
や単文、つまり複合辞としての用法を観察した後、「言う」と「来る」が意味的に接近する現
象を観察した。その過程で以下のことを述べたことになる。

(ア) 「といえは/といったら/という」との3形式は複文的用法から単文的用法まで
様々なものがあるが、それらは統語的に独立したものではあるが、意味的な関
わりを持っている。

(イ) 単語レベルでは意味的なつながりが見出せない語同士であっても、構文環境に
よってつながりが生じることがある。

課題も山積している。今回は、「言う」条件形個々の形式の詳細については触れられなかつ
た。例えば、「という」とは接続詞的な用法も存在するし、「といったら」は文末で使用され
ることもある。

(28) 「ところが、調べてみると、いくつか疑問点が出てきてね」江藤刑事が、も
ったいぶった口調でいった。「というと?」「まず奇妙なのは、死体が漸を脱い
でいたことです」
(『おれは非情勤』東野圭吾/集英社文庫)

- (29) 記録は4時間17分4秒だった。なんだか映画を見ているみたいだった。世界の壁も痛感した。海を越えて集まった市民ランナーのタフなことといったら…。

<http://www.asahi.com/food/column/oyatsu/OSK201004190023.html>

これら、個々の詳細については今後の課題としたい。

これと関連して、「言う」条件形には次のような用法も存在する。

- (30) 先日、出張で京都に行ってきた。京都と（いえば/いったら/いうと）、僕の妻は元々京都の生まれなのだが、普段は京都弁をまったく使わない。

これは前の発話の一部から、新たな話題を連想した場合等に用いられる。一見、複合辞用法のように見えるのだが、条件形に前接するのが名詞句に限らないという点で異なる。

- (31) 今朝、久々に長距離をジョギングした。走ると（いえば/いったら/いうと）、今では想像もつかないだろうが、実は僕は昔、マラソン選手を目指していたこともあったのだ。

これは動詞「走る」を条件形がマークしている。また、複合辞用法に前接する名詞句は「何・誰・いつ」等様々な疑問表現へとパレフレーズ可能であるが、この(30)(31)のそれは、敢えて疑問表現にパレフレーズしようとすると、「〇〇から連想するものは何かと言えば」のような画一的なものにしかできないように思える。この用法の位置づけも今後の課題としたい。

注

- 1) 本稿で扱う「といえば」「といったら」「というと」をまとめて「言う」の「条件形」と呼ぶことにする。もちろん、これらの形式が常に条件的意味を表すというわけではない。あくまでも便宜的な名称である。
- 2) なお、本稿では助詞「は」が前接する「はと（いえば/いったら/いうと）」という形式は考察の対象から外してある。
- 3) この品詞をどうするかは本稿の主たる問題ではないので、今後の課題とする。
- 4) この文を「もしも誰も言わなかったら、建設省がやった」のような意味で解釈すると容認度が増すようであるが、当然ながらこのような解釈は<引用>の用法としての読みである。
- 5) 「*」は文法的に非文であることを示す。
- 6) 前件の「発言」に依存して後件の「答え」が発生するというわけではない。
- 7) ただし、述部で指示対象を述べる文（指定叙述文）の場合も主題提示として良いかは議論の余地があろう。指定叙述文（西山2003の用語では「倒置指定文」）と主題の関係については西山(2003)を参照のこと。
- 8) 比較対象の「ときたら」がタラ形であることから分かるように、ここでの「言う」の条件形とはタラ形の「といったら」が中心になる。
- 9) この「といったら」「ときたら」は文法化(grammaticalization)が進んでおり、「言う」「来

る」と表記することが妥当であるかは議論の余地があるが、この点についての考察は本稿の主たる目的とは違うため、便宜的にこう表記することにした。

- 10) (25)の容認度を上げるためには、文の発話者の「視点」が「尾崎」に置かれているという解釈をしなければならない。そしてこのことは、本稿で述べた引用構文における「言う」と「来る」の意味が接近するための状況についての説明が妥当なものであることを示している。
- 11) ここで指摘した「おく」と「ある」の現象については益岡(1997)を参照のこと。
- 12) ここでは「だけ」「まで」は〈限定〉の意味で使用している。

参考文献

- 岩男考哲(2009)『『ときたら』文をめぐる—有標の提題文が意味すること—』『日本語文法』9-2, pp. 105-121.
- 西山佑司(2003)『日本語名詞句の意味論と語用論 —指示的名詞句と非指示的名詞句』ひつじ書房.
- 日本語記述文法研究会編(2009)『現代日本語文法5』くろしお出版.
- 益岡隆志(1997)『複文』くろしお出版.
- 松木正恵(1997)『『と思うと』の連続性』『学術研究—国語・国文学編—』45, pp. 27-39, 早稲田大学文学部.
- 三宅知宏(2005)「現代日本語における文法化—内容語と機能語の連続性をめぐって」『日本語の研究』1-3, pp. 61-75.
- 森田良行・松木正恵(1989)『日本語表現文型』アルク.

(2011年11月30日 受付)

(2012年2月24日 受理)